

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	田中 響
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授） 松村京子 副主査：（鳴門教育大学教授） 吉本佐雅子 委 員：（岡山大学教授） 佐藤 園 委 員：（兵庫教育大学教授） 鬼頭英明 委 員：（兵庫教育大学准教授） 前田智子
3. 論文題目	乳児との対面時の母親の視線及び応答性に関する縦断研究
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻生活・健康系教育連合講座 田中 響 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成26年2月10日（月） 16時00分～17時30分 場所：兵庫教育大学 神戸ハーバーランドキャンパス 講義室1</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>序 章</p> <p>母親と乳児の応答的關係は、社会性の発達の出発点であり、子どもの社会性を方向づけるものとして重要である。母親は乳児を見て表情・行動の変化や状況を読み取り、敏感に適切に応答する。そして、母親の働きかけに対して乳児が反応する。このようにして相互のコミュニケーションが行われていく。その時にお互いに見つめ合うアイコンタクトは特徴的である。大人は大人同士でお互いに長い間、目を見つめ合うことはないが、母親と乳児の場合、お互いに見つめ合って長時間そのままにいることもある(Stern, 1979)。</p> <p>そこで、本研究では、母親の乳児への視線に注目して、母親の乳児への視線が出生直後から約1年間にどのように変化していくのか、視線計測機を用いて、実証的、縦断的に検討した。</p> <p>第1章 乳児との対面時の母親の視線及び応答性—生後2日から4ヶ月までの変化—</p> <p>乳児の反応は生後4ヶ月間で大きく異なり、新生児に見られる内因性の生理的的微笑から人に向けられる社会的微笑に変わる。そこで第1章では、社会的微笑の出現を含む出生直後から4ヶ月間における母親の乳児への視線と応答的行動の変化について、視線計測機を使用して、分析した。方法は、母親に視線計測機（帽子型）を装着させ、対面で自由に乳児をあやすように指示した。計測は、生後2～3日、1ヶ月、4ヶ月に実施した。母親が乳児の「顔」、「身体」、「その他」のいずれに視線を向けるのか視線分析を行った。さらに、乳児の微笑時を抽出し、乳児の微笑時の母親の対応について検討を行った。その結果、乳児との対面時、母親が注視する対象はほとんどが顔であった。乳児の微笑への母親の応答的行動は、社会的微笑時に急激に増加していた。また、乳児に社会的微笑が出現することによって、母親はそれまで以上に乳児の顔を注視し、あやし言葉や接触行動をより多く出現させていた。このような母</p>

親の応答的行動の増加は、乳児とのアイコンタクトを増加させ、社会的微笑をさらに促進させることが示唆された。

(小児保健研究 71(3), 414-419, 2012)

第Ⅱ章 乳児との対面時の母親の視線及び応答性 —生後4ヶ月から10ヶ月までの変化—

乳児期初期、特に社会的微笑の発現によって、母親は乳児の顔をより多く注視し、乳児に対する応答的行動を増加させていた。このような乳児と母親の二項関係は、やがて乳児が周囲の物に興味を示すことによって、乳児と母親と対象の三項関係のかかわりへと変化する。そこで第Ⅱ章では、二項関係から三項関係へと発達していく頃に、乳児との対面時の母親の視線及びあやし言葉、あやし行動がどのように変化するのかを明らかにすることを目的とした。測定は、生後4ヶ月、6ヶ月、8ヶ月、10ヶ月の4回、縦断的に実施した。母親の視線停留点を乳児の「顔」、「身体」、「その他」に判別し、「アイコンタクト」、「共同注意」について視線分析を行った。さらに、あやし言葉とあやし行動を判別した。その結果、どの時期においても母親が乳児を注視している時間のうちのほとんどが、乳児の顔に向けられたものであることが明らかになった。直視する視線は相手の視線を引き付けるということが知られている (e.g. Senju, 2005)。本研究においても、母親に直視された乳児は母親の視線を受けとめて見つめ返し、母親とのアイコンタクトを生起させていることがわかった。しかし、月齢が6ヶ月、8ヶ月、10ヶ月と進むにつれて母親が乳児以外の対象を注視する割合が増えていった。これは、乳児が周囲の物を注視するようになり、母親が乳児の視線を追うという共同注意が成立したためである。この共同注意によって、母親は乳児の顔への注視が減り、乳児が注視する物への視線が増加していったといえる。しかし一方で、あやし言葉やあやし行動が増え、母親からの積極的な言葉や行動の働きかけが多くなっていくことがわかった。乳児の視線が母親から他の対象へ移ることによって母親の言葉かけが増加し、母子間のコミュニケーションが増したといえる。

(小児保健研究 72(4), 493-499, 2013)

第Ⅲ章 学校教育における保育学習への活用

第Ⅲ章では、本研究における母と子のアイコンタクト、社会的微笑、共同注意、母親の具体的なあやし行動・言葉のビデオを高等学校家庭科保育学習で活用することを検討し、教材化の可能性を提案した。

終章

出生直後から生後10ヶ月までの乳児に対する母親の視線に関する縦断的な研究の結果、乳児の社会的微笑の出現により母親の乳児の顔への視線が増し、共同注意の出現によって母親のあやし行動・言葉が増加することがわかった。これらのことから、乳児と母親との対面場面が相互のコミュニケーションの強化につながっていることが実証的に示された。

2. 審査経過

論文公聴会に引き続き開催された審査委員会において、論文内容について質疑が行なわれた。特に、測定時期、乳児側の変化、乳児の個人差、社会的微笑及び共同注意の根拠、研究結果の教育への活用などについて質疑が行われた。質疑を通して、本論文が示した乳児との対面時の母親の視線及び応答性に関する縦断研究の成果は、独自性、発展性において高く評価された。さらに今後の教員養成の研究及び教育に貢献するものであることが確認された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 田中 響 の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。